

# 村史編さん資料の収集について (二)

—— 山 田 俊 卿 の こ と ——

高 宮 昭 夫

(会員・米水津村浦代)

前回の「高橋玄策」調査のため、羽柴先生に帯同して佐伯市戸穴の高林伝男医師(米水津村出身)を訪ねたことがある。その時も、高橋玄策のことについては松樹軒(高橋玄策がお寺で開設していた文庫)の本を一冊持っているぐらいで、その他の資料は参考にならなかった。

しかし、高林先生のお話してから、同じ米水津村出身の山田俊卿が話題となった。山田俊卿については、史談会員の古藤田さんが、五十九年九月十一日から三日間にわたって大分合同新聞に「佐伯地方の先覚者たち」と題して掲載していた。また同人が、今夏出版された『佐伯地方の先覚者たち』の中にも書かれていますので割愛しません。高橋先生との雑談中、佐伯中学に勤務の史談会顧問、平田幸一先生が、阪大医学部卒業の後大阪で開業してい

る長谷川等先生が詳しいだろうと紹介された。平田先生には、史談会の年末集会の席上お聞きしたら、山田俊卿の曾孫が出版した「山田俊卿伝」を一冊持っていて、それを史談会誌に発表したということだった。

昭和五十年頃から大阪在住の長谷川先生との交信が続いた、その一部を紹介してみよう。

当時、山田俊卿の資料をたづねる。私の質問に対して、山田俊卿の援助をうけて、大阪市桃谷町で御夫婦で始めた岩崎佐一先生(佐伯市出身)の精薄児教育学校(桃花塾)が大阪市郊外の富田林に規模を大きく開設されました。そのこの図書館に資料があると思われるので連絡してみなさいと指示をいただきました。早速連絡しましたが、何の応答もありませんでした。

私（長谷川先生）が最初に山田家を訪れたのは、大正六年の春だったと記憶します。阪大に入学出来て、父の添書を持参し、四天王寺の大鳥居前の山田病院（古びた昔風の玄関）を訪れました。応接間に通されて、田舎ものの少年は、片隅でかしまって居りましたところ、数年前に佐伯中学の講堂でお話を拜聴した小柄の山田先生が静かに這入って来られました。「貴方が簀川様のお孫様ですか、どうか上座に移って下さい」私が驚きながら遠慮していますと「貴方は、私の大恩人の簀川長兵衛様の孫様です、お祖父様の分も御挨拶させて貰います」と云う様な工合で、驚く少年の私を上座に坐らせての応待で、ほんとうに面喰いました。これが初対面でしたが、以来先生のなくなるまでお世話になりました。私の学資も「奨学資金の会」から頂ける様にお世話して下さって、大学を卒業するまで何ん自由なく勉強することが出来ました。後に佐伯中学校長をされた奏政治郎先生が来阪されたさい、先生と俊脚先生とは、肝胆相照すお交際をされておられたそうです。この様な先生方に訓育された私は、そのままの

人間として成長しました。そして生涯を世の爲になる事に努力して晩年に及びました。「何れの場合でも全力を尽し、人のしない事を仕上げておけ」と訓育されたままの半生を送りました。……中略……

なお私の父の話によると山田翁が若い時、何か大問題を起こした時、死一等を減じて救ったのが、私の祖父簀川長兵衛だったらしく、しかし偉人はこのくらいのエピソードはあつていいと思います。

と長谷川先生は結んでいます。

そこで、私が関心を持ったのは簀川長兵衛のことでした、長兵衛は毛利藩十一代高泰公の天保十三年（一八四三）から嘉永四年（一八五一）までの席帳の中に、御家老三人、次に御番頭二人の中の一人に簀川長兵衛の名が出て来ます。この長兵衛のことについて、もう一度長谷川先生の手紙を引用しますと、

「私の父は、佐伯藩簀川家の次男に生まれましたが、府内藩大給公の典医の家へ入婿しました。その末弟が簀川潜蔵で、明治の初め浦代（米水津村）で教師をしていましたが、浦代の女の人と恋仲になり、二人で遂電して、伯父（潜蔵）は大阪で教師をしていました。

二人の間には子供がなかったので母方の親せきから養女に、恵美さんという方を迎えました。

ここで先生の手紙を一応切りますが、その恵美さんが実は私の母と同級生で、家も近かったため、二人は特に仲がよく、恵美さんはよく私の家に遊びに来ていました。恵美さんは、産婆さんで、私も恵美さんのお陰で、この世に生を受けました。恵美さんの口からか母を通じてか、よく聞いた言葉の中に、私の養子先は、士族で、躰がきびしく、そのために家を出たということを私も子供ながらに記憶しています。長谷川先生との交信から、俊卿先生の曾孫の住所も知ることが出来ました。大阪市在住の山田孝雄という曾孫との文通も成功、そしてその曾孫の方兄妹と妹の主人（近畿大学教授）と三人で、五十八年、米水津村を訪ねていただくことが出来ました。しかも、俊卿の遺品をダンボール一杯も持参していただいたのです。

特別に俊卿の遺品を顕彰する部屋はありませんが、米水津村民センターの資料室に大切に保管しております。当初、高林先生の訪問以来、山田俊卿曾孫の米村まで、約十年の歳月を要しましたが、長谷川先生と山田俊卿、

俊卿と實川長兵衛、そしてその養女と私の母との関係、調査も又楽し”を思わず、口ずさみます。

## 会費未納の方へお願い

『佐伯史談』は昭和五十五年以来満六年間定価据置きです。諸物価高騰の折りに珍らしいことだと思えます。経費に余裕があるわけではありません。赤字です。雑誌を郵送すると会費では不足です。

しかし、それでも、どうやらやって行けるのは、現在のところ、二十万円の補助をうけているからです。しかしこの補助金はやがてなくなります。その時の事を考えておかねばなりません。

会費の納入は会員の御協力により順調ですが、まだうっかりしていて未納の方もあります。その反面六十一年六十二年まで前納の方もあります。

まことに恐縮ですが、本年度の『佐伯史談』の巻末の会費領収名簿を御覧の上、未納の方は早急に納入下さいますようお願い致します。